

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 JAPAN Tama



里見八犬傳

五輯

六

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Color Group: Yellow Magenta White 3/Color Back

1
600
249

南總里見八犬傳第五輯卷之六

東都 曲亭主人編次

第四十九回

陰鬼 阳人 肇て判然
節義貞操 迷ふ苦諫を

カ二郎尺八ホをもひひきなく父稽平が甲夜の間よ多く門を立とを音音が拒むと
容をぞきと嘆く。俱ようち驚きく顔を嘆息をうへぐ。音音も今さゝ後悔の
額を撫で嗟嘆しつ現彼人の心操義不仗と恥をもつてもあらば故主の為よ心を
盡せ。此度の功を子共に譲りて船を沈めて戸田河の底の水肩をありきりんや。
然ともあらぬ死魂の門が立固ふとす。情由どふ笑ひて身の隨ふ罵辱をも
ううればむと心と葛の葉のううふよて脅迷ふ旅宿かうの草の原帰来
あらあきあらふ冥土の障とからせん痛すゆと密音ふテテ立ち歎けば。



所夫よりあなた事の蹟をさん食り共よ立あひよ。とゆく身を起
ま。尺八急よ推禁りよ。何うぞ物あひ狂ふ。今柴小屋へゆけばとく又互が
大人のそくそくのう疑へくをひどくゆけ。誘引とも誰も立ん益かにうど。
云け。单節は有撃よ争ひよ。戸棚のうをさん入れが曳ひひそりと頷きし。
如右正タ一室。あらばひ單節が疑も。あすか寝あひ。柴小屋
を。邁ん。まづ臂近あひ戸棚を掲らば。み二包の行袱の有や無やを知是
易う。ゆきそと。遠く立んと。ひを力二郎へ呼禁り。頭をうち掉り。
噫大入氣や。だらめ。無益の穿鑿ちうとう。今彼迹を察せども後ふ必多
す。あらん急が歎を倍せ。とあらあひげふ叱られて。応をひ。先も亦釋
ども。とぬ疑ひ。尋思の頭を傾れば。音音も眉根を顰り。单節が正しく行
程を。彼人より受あひ。とひひゆく怪しき。執念深き人の七魂が行脚

ひてひよ。かぶ。うろこ。ゲ。えりとも。あひがち。東
曳ひ單節ハ胸曇れて後をくま。影さも項背寒く。かま。ふ或ハ驚か或ハ
歎く心の悼み。かね方かたをやめふ。ひえと單節がひよ。世の冤魂とよ
り。あとえせ。けど目前ふ。一矢。も。稽平。も。の甲夜。強顔く拒れても恨む。
けき。き。あもう。けき。目前ふ。一矢。も。稽平。も。の甲夜。強顔く拒れても恨む。
氣色も。がく。竊か告げ。ありて来つ不。要時容れ。とうち勧解を。い。痛声
は。阿姑。のね。あらの和だら。折さり。母屋へ案内。進せ。とらひ。おければ
あく。さやび。あ。まきこ。や。まき。い。あ。も。の。云云と。具。報。柴置小屋へ扶容れ。潜。の。物あひ。も。暇も。か。娘を迎。どんを。
と。瞭。く。も。ゆく。か。後も。これ被ふ。事の繁く。彼を。を。ゆえ。く。ば。心
か。今。約。夢。秋。幻。欲。世。か。犯。人と。變。か。彼。處。か。心。地。ぞ。心。以。彼。入
き。の。肩。か。うち。被。あ。ひ。る。袱。包。を。う。ま。と。その。折。ま。う。が。受。ど。く。と。あの。置。納。の。小。戸
棚。へ。竊。小。藏。り。措。う。だ。と。も。又。夢。の。跡。も。あ。く。大。人。共。侶。不。滅。失。欲。今。脅。あ。く。ん。欲
り。怪。と。あ。ど。も。彼。か。此。よ。内。疑。ハ。罪。あ。く。要。あ。れ。所。為。で。ほ。れ。ど。誘。あ。玉。ぐ

法師ふ諱諉て故郷へ像見を贈す。すの物の本やも見えられば世よかたゆえ
誣るや。然るをカ二尺八手をあの戸棚よ開てかと禁るやあらゆぞ隠す。
あくま洋起ひ。をうなじをどああれども。をうりのう何うれあくん吾俗が許を
媳ぬ達や。共侶が開てそん誘ひを。軒く身を起せば曳す単節も後方が附く。
とくまもとくち。あら。うき。もか。おこ。ひく。ひとよ。あくだ。つき。
戸棚の下が立あり。親火克人す。もか。おこ。ひく。ひとよ。あくだ。つき。
戸棚の下が立あり。親火克人す。もか。おこ。ひく。ひとよ。あくだ。つき。
胸を貫く五更の鐘と。共み八声の鶴の音も。鄰の時遠けれど吹鳴を風小
をひれて。殊更近く。聞え。あ。曉うばかりやう。時子を來つれと周章の尾
弟の目を指せ。心の中別を告て。竊急ぐ起行の準備。小笠を引車と弛
キ。脚絆を。幼みどう。結更に嘆息を。ともみか知らひ。先立。音音。棚の
きうと。あけ。うき。あら。ち。さく。を。ゆく。やく。うき。ひとよ。おれ
袋戸を開ても暗に彼此を拂れば果して。卓は當る二包を。うき。ひとよ。おれ
り。あ。ひとよ。ひとよ。うき。ひとよ。うき。ひとよ。うき。ひとよ。うき。
然とさ一示を。引をく。左見右見。くま。うが受。う。う。時も鳥夜。

色の色を定ふ。不認り。仰く。終ども。との餘へを庵で。お膳を。あ。の二包で。傍か。と
以。音。音。ハ。嗟。嘆。し。ゆ。この世。お。死。魏。の。齋。セ。一。物。や。う。ま。で。迹。不。送。ハ。怪。し。も。
あ。ゆ。だ。り。の。限。り。何。や。う。あ。く。ん。を。の。包。を。と。く。披。望。く。又。と。う。不。單。節。ハ。と。く。
結合せ。包の端の堅。を。と。く。解。分。れ。ば。曳。ぬ。も。軒。て。お。傍。か。く。二。箇。の。包。を。英
侶。不。被。起。く。それ。が。あ。く。つ。不。頭。れ。出。一。男。子。の。斬。首。変。り。一。色。も。一。雙。の。死。相。よ。駭。く
媳。姑。お。ひ。ぞ。齊。一。声。立。て。退避。う。背。の。く。お。忽。地。笑。ゆ。苦。惱。の。兩。声。燐。と。燃。る。鬼
燐。の。光。お。再。驚。く。婦。女。輩。こ。何。事。ぞ。と。見。え。と。バ。今。夜。在。つ。る。カ。二。郎。尺。八。丈。不
忽。然。と。形。ハ。消。く。あ。く。ま。う。り。空。の。く。一。奇。異。怪。傀。ふ。誰。く。眼。惑。ざ。ば。死。や。カ。二。郎。よ
天。八。丈。南。丈。所。天。よ。ま。う。伏。ゆ。と。三。人。齊。一。呼。え。せ。ど。も。答。ハ。絶。く。空。蟬。の。蛻。の。殼。よ
苗。わ。お。バ。胸。淡。れ。心。惑。ゆ。く。是。も。夢。秋。と。あ。く。覺。ぬ。無。明。の。醉。ハ。忙。然。さ。う。かる
惑。ひ。の。中。や。も。音。音。ハ。信。と。心。に。く。二。級。の。首。を。燈。火。の。ほ。う。近。く。引。る。を。そ。づ。く

ス。嘔鬼の單節もこれを何どうぞ。おまとこれへえまくぬ頸、あり死する人
靈ありとる。精平とく。亡魂がこの忌へく。鐵な物を何のめふら齋て。東の山もそや
日來子をもひ。良人を慕ふ。俺们が心の憂ひとあく。知れる。狐狸の所為なれど。
かれば。目今姿を隠せ。子共を真のこ。子かあく。精平とく。尼えども皆是
心の迷ひと誘ひ。脂燭とあ。縁嬢す。庭の。柴小屋裏も。邇て。獸の足跡
あゆみせん立かむ。とつざ。東の单節は。忽地曉りて現る。あらうつをす。す。
變化とあ。今坐も。物の悔。よ。も。单節は。忽地曉りて現る。あらうつをす。
外見よ人あく。ま等。霎時立む。あれ。一毫あふ。懲れ。が。未違。千里を
か。を。怜判けれども。婦女子の臆斷理りふ。似くみを當ら。もく。惑ひと釋會。
推禁り呼被く。障子を颶と推す。く。と。されば。是別人か。神宮河原の精平
す。彼がり。と。も。く。亦。接駁く。兩個の媳婦。小音音ひを。く。目を注て。冷笑ひ

ちと。さへ。あふ。を。こ。のきよ。の。ご。と。ぶ。の。く。の
マ。些も騒が。も。噫。鴻。許。年。野。狐。が。漫。不。人。を。魅。る。と。も。幾。遍。そ。の。術。不。衆。せる
べ。死。り。速。ふ。立。も。去。ら。ぎ。生。皮。剥。く。腹。を。冷。ん。後。悔。を。あ。と。罵。り。く。准。備。の。懷。劍
先。ゆき。き。や。更。二。寸。技。け。く。仇。と。疾。視。く。う。み。と。死。精。平。を。抗。く。早。る。を。く。だ。それ
あ。を。き。く。く。ん。け。豈。妖怪。変。化。か。ん。や。然。る。を。か。疑。う。刃。を。き。く。權。ほ。ハ。拙。く。と。や。ふ。豫。て
身。を。護。り。仇。を。禦。ぐ。懷。劍。あ。く。ば。れ。も。亦。身。を。護。り。仇。を。禦。ぐ。一。刀。あり。これ
え。か。と。諭。じ。く。突。立。り。く。朴。刀。を。晃。り。と。技。く。側。あ。る。堅。木。の。柱。を。礎。と。繫。修。燐
み。裏。刀。尖。銳。く。節。を。く。い。を。五。六。寸。研。入。む。刃。を。ひ。を。く。引。く。鞘。小。納。り。そ。莞。余。と
うち。笑。い。大。刀。ハ。武。德。の。名。器。や。く。非。常。を。檢。一。非。常。を。防。ぐ。こ。の。故。不。妖。怪。変。化。
これ。ふ。遇。へ。ば。本。形。を。頭。ま。と。い。か。と。か。素。す。冤。鬼。狐。狸。の。弄。ぶ。死。物。か。ね。
そ。の。疑。ひ。と。釋。く。不。足。え。そ。く。と。ひ。く。て。を。が。侵。裡。面。よ。進。い。る。姿。へ。く。て。寢。れ
く。心。雄。く。だ。老。人の。絶。て。臆。ち。氣。色。か。く。も。上。坐。ふ。著。一。ぶ。鬼。の。單。節。ハ。今。け。く。



顔のまゝも成られて口を掩く示れてまづされ音音ハ油断せ。半信半疑の膝を進む。瞬もせを稽平を。まづ僅か頷む。つゝも趣すあれど。胡越ふ等へ。姥雪ぬ。今さう思も憚ら。吾俯を訪見テ土産の二種。この斬首へつるを。况や方がとこえ。まづよひ。まづいぬ。まづは。まづゆ。ひそひ。まづく。まづく。まづく。扁河へ入水のうハ甲夜の間。犬川莊助とうふ旅浪人か竊ふ和子ふ報。とれ。吾俯り巨細ふ竊笑。然るを。わがハ恙か。武藏の盡處。あくと。あふ本まき。つあぐ。瓦。疑ひの三つ。且。瓦。瓦。入水のうハ獨犬川。笑てのを。モ。カニ郎。尽。も。當日。戦ひ云々。と報。あり。を。おひだ。告。子共。真柴焼。朝の炊。も。あく。煙の。ごとく。滅失。今又。わが。お見えん。と。を。疑ひの三つ。け。を。か。そ。の。お。筋が。變化。や。だ。兩個の子共。と。を。お。抑。亦。何。め。あ。わ。ぬ。う。お。ゆ。ゆ。と。詰問。れて。稽平ハ件の首級を。と。見。か。う。と。て。縁故を。詳。せ。ば。然。る。疑。ひ。ハ理。り。あ。れ。ど。も。武藏。ふ。き。え。き。より。ひ。と。よ。そ。く。ま。う。お。き。と。ち。う。携。ま。て。甲夜。か。單節。ふ。遞。と。う。二。包。ハ。れ。や。だ。お。れ。この外。物。わ。り。納。り。处。を。

索。まよ。と。つ。の。单節。ハ。訝。一。と。も。ひ。又。舊の棚の袋。戸。推。す。け。ば。曳。とも。俱。が。脂燭。と。彼。限。あ。く。敗。獵。ど。も。瓦。砍。と。む。物。も。や。倘。置。處。の。違。る。砍。と。夜。具。措。く。破。戸。棚。と。ま。た。く。え。れ。ば。果。と。物。あ。秋。の。色。異。れ。ど。も。そ。の。二。包。を。結。合。せ。れ。れ。も。彼。共。ふ。ゆ。と。似。う。单節。ハ。ま。く。両。手。を。う。と。棚。う。と。も。を。取。り。し。れ。や。ゆ。と。指。示。せ。ば。稽。平。う。ち。く。と。れ。な。う。と。れ。や。且。く。其。處。不。措。私。と。い。れ。く。單節。ハ。あ。う。を。ゆ。と。思。議。の。う。や。せ。う。こ。う。が。甲。夜。よ。受。う。一。包。が。正。く。これ。か。ぶ。收。置。ま。る。小。戸。棚。ふ。わ。瓦。瓦。み。と。の。間。不。外。を。が。ま。と。ま。ん。加。旗。く。似。う。是。彼。四。箇。の。聚。物。初。の。度。ま。う。却。う。そ。の。二。包。ハ。何。人。が。も。ま。を。隠。て。置。う。と。れ。も。怪。た。ま。く。も。ま。と。ひ。じ。傷。を。え。入。瓦。音。音。鬼。ま。も。呆。果。て。寔。ふ。甲。夜。あ。曉。ま。る。あ。う。娘。女。の。智。惠。の。浅。懶。を。術。る。遠。漁。火。人。放。鬼。放。と。稽。平。ふ。疑。ひ。ハ。瓦。釋。う。う。且。て。

積平ハ多大ゆう一膝うち鼓にて音章よき。物をぬ包の外へ推量の外
とも。あすかと來り。されば此地へ多大折身長隆た一個の武士腰に兩箇の包を著
し。白井のまゝ走り去。先立て邁くあけ。これより先は彼邊を仇撃の事の趣
を。風吉を途モ笑。是彼もひあらむ道節めふわくをや。とをゆくも心つぞ。クハ
がつかる跡を跟く。失ふと。程も既か。日暮。かこそ初更の左側。小件の
武士ハ杜薈。塚の脣。立あく。をのど見られ。樹隠れ。その為体を窺ひよ。
天結陰り。觸。定。立。あく。を。腰。包。取。塚。贈。祭。と
く。又。又。情。包。ゆ。彼入の贈。贈。物。雙。首。級。次。わ。バ。推量。重。罕
く。道節。ぬ。と。あく。近。道。間。と。や。わ。く。一個の癖者。塚の蔭。ゆ
く。ハ。そ。きん。と。頭。れ。き。件。の。包。を。取。り。と。あ。この。武士。ハ。取。せ。ど。と。桃。争。か。力。量。早。技。優。さ。ど
き。お。だ。如。法。夜。不。乱。れ。ぬ。卷。の。奇。妙。タ。と。と。時。移。一。箇。必。切。け。れ。ん。

且。雙。方。を。推。鎮。を。そ。の。名。向。ん。と。老。後。の。腕。立。走。蒐。り。て。こ。の。杖。を。二。人。並。へ。ゆ。突
き。推。分。ん。と。せ。ー。と。な。肩。互。掛。る。兩。箇。の。包。を。ち。り。擗。地。落。し。慌。忙。た。彼。此。と
機。揚。當。取。る。程。か。彼。癖。者。が。後。内。底。刀。尖。枉。か。石。塔。を。研。削。り。る。石。火。の。光。り。小。件。の
武。士。も。而。闇。の。包。を。引。提。く。直。躬。と。立。と。互。え。る。形。ハ。消。く。往。方。を。卸。は。是。是。元。火。道。の
處。か。奇。柄。を。獲。る。一。人。ハ。道。節。ぬ。あ。べ。と。誰。う。亦。ゆ。あ。ふ。至。ら。ん。の。名。を
手。と。向。れ。ど。必。彼。明。か。べ。と。ひ。決。ち。慕。一。ふ。要。時。も。あ。べ。又。舊。の。野。路。を。こ
續。を。も。あ。べ。ゆ。け。を。か。く。見。れ。ハ。も。あ。く。あ。の。門。邊。か。立。と。免。單。節。グ。竊。不
あれ。あ。べ。こ。や。い。こ。り。憐。え。柴。小。屋。へ。と。懇。せ。う。か。ま。一。程。か。莊。役。が。白。井。の。下。知。と。僧。へ。る。辯。の。趣。演。笑
え。く。心。ふ。か。れ。ば。尾。も。あ。い。ゆ。ぞ。竊。か。其。处。を。立。出。く。或。か。背。門。す。庭。面。す。間。か。母。集
ま。り。を。つ。け。一。渠。あ。先。か。う。ち。つ。だ。く。あ。ふ。集。る。兩。人。あ。う。そ。の。一。人。ハ。道。節。ぬ。彼。癖。者。

。ひねつゝとものねまきのひがぐま
立て犬塚いぬづが友犬川莊助舊名額藏とくづのやうすけの記。その值遇ちゆうやすくて不意白井の
仇敵あらわら路次じの窮阨きみやより犬塚いぬづと云。のみよ。とら。おち。
驚おどろかせびから便宜ふりへよく獲とく。と見參さんへひるをとやつて、舊婦いのちの
ちの罵ののれ。不似ふしきのうをええり。恥はずへくと黙止だましう。若是これて又道節どうせつ奴やつ、犬塚いぬづを
索さんとえ犬川共侶くわいり遠とおげ。外面おもてよ出でかひ。この間あいだを子共こどものうを音音おとおとを
報しらべんとえ幾遍いくべんとあく縁頬えんぎへ足踏あしだうけす。面おもてをかまひる程ほど不兩個ふりょうの媳
婦め相侶あいりれ。あるは力二ぢゆうと尺八しゃくはを。と浅あさすくうれり。おもゆく退しりぞく檜下ひのき竈かまど
柴垣しばはきの簾れん不立たたずく通宵つうしやう念佛ぼくねの外他ほかす。うれり。おもゆく香かを燒やく。事ことあると見みた
佛足ぶつそくを戴くわくと。世よの常言じょうごん不似ふしきう。おどり。ま
包いざなを送おとせ。と。道節どうせつ呪ののしま。拾ひき。おもむくとこれこれへ亦道節どうせつ呪ののしまの二包ふたばくを撥撥取ははくとり。
りくと。休やすふ肩かたよ。まつて。金きんを甲夜こうやふ。單節たんせつす。遡のとせ。も。儂わいす。ひ。され彼かれの
が。然しから。う。子共こどものうへ立地たてぢふ。あく。ん。そ。く。そ。よ。と。そ。ぐ。る。言葉ごんばの
本末ほんそく今いま。さう。小音音こねんねんへ甲夜こうやふ。竊聞くわん。彼莊助かれじょうすけと道節どうせつが問答もんとうせ。と。あ。ふ
僅すここの條じょうを疑のひ。稍解すこと。解わか。解わかぬ。包いざなの氣きふ。かる。曳ひす。草節そうせつの燈火とうかの和わく。入いる。
兩袖りょうその結塊けくふ。ま。よ。せ。か。れ。ば。音音おとおとも。間近まんきんく。膝ひざを。進すすむ。披ひく。を。不。れ。ば。是これも。亦よ。兩個りょうりょうの
人の首くびを。れ。ひ。う。や。と。泉いずみれる。三。人。齊そろ。一。睛まなこを。定さだむ。ゆ。く。右。手。左。手。不。れ。ば。不。愁。や
力二郎りきじろうと。尺八しゃくはが。首級くびを。色。を。変。れ。あ。く。と。今。ま。で。在。一。面影おもかげふ。紛まぎへ。く。心。あ。れ。ば。
又。胸。渋。れ。心。焦。れ。て。嘔。淺。お。せ。所。夫。よ。伏。よ。子。共。ゆ。そ。と。共。舌。か。歎。だ。游。倍。を。愛。情。の。首
級くびを。取。て。膝。よ。乗。一。素。朴。髪。を。搔。揚。て。あ。泣。つ。多。ど。身。ひ。難。る。味。凝。の。文。不。怪。

死喪のかれと涙の雨ふ六の袖を絞りもあらず位論む憂愁漏れぬ稽平も慰め
る。頭を低く斑の歯を昨締る。それより勇力を攻念仏胸ふ急鉢うつども豪
勇の人間か。連れぬ現會者定離かうとあれと觀念の眼と闇ともす落る。
涙ふ更に玄然う。當下音音ひやう聲く志氣を喪失して原来子共を撃たれ
けを心ゆうやうかべ。その戦役の為体を安葬へさよとひされ。卑き單節
稽平が左右の膝を衝詰て世から死人狹と疑ひ。大人ハ還く恙か。恙も
なくかへれどもひ良人の死顔をゆるび。武藏の家暴闊て悔し
浦島の如玉匣そりを。かうゆり果一趣をあきせてじゆふを。やま浦大人と
呼みて。更向ふ声も枯れぬ死歎をも徳の繁茂外央降らぬ驟雨。撲々
ぢく俯沈む。媳婦と媳婦とふいとぐく泣立れ。稽平の涙の目皮あがく死済
あきえ。幾遍欷いひとまれば生憎不塞る胷を養ひ。博て息を。とつねく。

これらはよく問れども詳か告んと焉ぞへ恥ひやうへられや。訪ん音音よ勿泣せ
よがくとも。かきと。媳の連涙を禁めて笑ひ。大約人の辛不幸。倚代へ糾ふ纏ふ似う。わが犯を
罪料を宥められてもそれより快らぬ老後の寸功兩個の子共を譲らんと多ひ決を
ととく。扁河小投されしと死ぬ果ば年來熟く水枝の邪魔よやくとやく。もれ。おま
扁河小投されしと死ぬ果ば年來熟く水枝の邪魔よやくとやく。もれ。おま
くへ流れて東の岸よ著したと浅まく舟をぬき。身をと今こそ小棄へ
懇よ助る神の恨く濡る。休む忙然と且く水際よ立在つ。身をかくす業報のあき
滅び。ごとあらがう。かくふくもあらぬ弟の水よくば死れぬもの。身を彼大塚の
城兵ふと刺かづく。其處よ嚴を曝んと身も苦へ。恩愛の絆よ牽き。凡夫心子
共の先途を。まほよす舊の岸邊小赴け。が戰ひ果て人影あり。歎歎躬方欽彼
此の傍横もろ死骸。喜ぶ子共を擊れども。とちがつらくも暗だ夜よ。の見る
迹を索え。送もなく檢せ。ふと暗ければ身甲の威の色も見え。よび。軀のよき

定う於て。其の故ゆき捨果し命を要時存在くつて子共の存亡を定めん。後かともかもかと多ひて之の曉よ神宮より宿所より走り又りて心竊ふ準備し姿を変へ次の日よ大塚へ赴かゞ街談讐説を揚向ひてか戸田河原の戦ひの陣番丁田町進ひ力二郎より撃れう。されど隊の兵々東の岸よ踏苗りく尺八と戦ひ折力二郎が援來く胞兄弟力を勵へる奮戦突戦瞬間よ雜兵夥刺伏せを頻よ克よ衆うらむ。町進が属役ふ仁田山晋五と呼ゆ。四五十名の隊兵を麾下に大塚より援あつ連放する鳥銃か力二郎も尺八も兵所の砲瘡竟よぬ堪せ間近に敵と引組く刺ち入て伏す。力二郎が首級をもとて大塚信乃と偽り唱へ尺八が首級をもと小廝額藏と偽り唱へ。けやも庚申塚の邊ある棟樹の下よ泉らきと縛人口よ懶れをればうそをや子共を先ごそく死後れる老が身の方もな免鬱憤よ腸を断歎がて獨つらひやう。

泉首せよと子共がタク悔むとその甲斐あふらうねと侵入かが偽名け。塚犬川
兩豪傑の恥を雪やく云云と云ふ方あるもとの人々も報金をもと只管よがへ要時
あぶ世ふとの日を消すも一日千秋されば更闇人定りて庚申塚ふ赴かゞ心當か棟樹
下入潜び近づひ辛して取立せよ子共の首を豫て準備の行狀ふ椎包を引提て走ると
あざりくむかくび近邊か夜を衛る兩個の獄卒棒挾を追蒐来て癖者等と呼制う
縛既ふ急かれば両箇の包を秋草の中よ隠して些も擬議せだ返しわせ引つけて晃
まと抜く朴刀ハ光の呑ふねかその業物先よ進す獄卒をばくをすんと砍伏せく。
かくを刃かえ一卒の棒りく共よ首を撃ひ落しつけ入りく内へくる二つ大刀小左の肩うち
ちき。よきをきくちうがよとよとあひ。うちをよきをきく。みひだく。さくふ
乳の下まで乾竹創ふ血け立てる刃の刃よ叫びもあらず身を轉じて仆まう。これ
聊慰やくもあく鮮血を拭ひ納め朴刀ゆく叢をよけや包を取ゆて又携ふく
畠向を歩涉して三四日と夜を日よ續くこの地よあつたハ一切もが身の為ゆだ件の

と夏の趣を由縁のもの不送さばハカニ郎尸ハホグ忠死義歿を誰え俗へん音音八年
來中絶しを再會快く終ども渠やべてと人ゆ一法を踰るハこれ人情美を
進むハ公道あり。故主のゐても子共のゐても兩立し已べくも。と多もうづみ阿容を
この隠宅より索め既往をもぎ云云と報後バハ罵られ拒れてもかく懲らふ。
あよ一宵をぬ。柴の小屋より想外かく故主のえと子共が亡魂竊笑つ又翻寝
哀歎交腸も袖もが離き感涙を絞るもあも不思議の一條カニ郎尸ハ死りて
五日はゆすれども靈ハこの土を去らばく在一面影まき一げふ且くあよ頭れど
母と妻とを慰やへ。嗚呼孝きるを。義あるを。その折まれた外に立く彼暗譚を
笑ひ。障子の透すらしくと見ま勝ねが呼々くわざ下圓坐より入らぬと要鞠
くらみ頸を携わるゝれよ。逢ハ消れ失ふと躊躇ひ。生を隔の紙一重佛を
あせらむ。そあをうながさどま。ま。それとも
懇む唱名も音やを卒の終夜涙子暇あた魂を誰促ほあらぬどもハ吉の鷄の

序
鳴べぞ驚されく冥もく陰火の光り鮮々と窓すむをされひう振ふるへ
かく今まをすみか身達よりハトわふありと胸の苦一ゆゑと口説立く告れば
音音も媳婦同胞も哽かへう咳へりく泣き外よまも観哀悼悲愁のを中に
音音ハ僅よもひえや。頭を擡て嘯鬼の單節もまみを歎かひか妻子の涙ハ覗
人の弱かなると昔よりよも実更欣然もあぶ後世をも天すれ九貴だも賤だも
武弁の家よ仕へち命を豫くか死すのとひちびと人かみふ捷れ忠も義もあうど
主の先途不あぬども教を守り義ふ仗まく愛した友を薦んあふとの日の歎も外
かく亦是讐の麾下の武士大石兵衛が陣番を撃捕るのをかく犬塚大川両雄の
身からふせられ死して榮ある子共が武功この人やねや父も父なり子も子なり。
主の死もやせへへ。ちんそもあきら。こもこうや。ひてれとを
叔も画す。稽平より恩の負ぬ誠心の子共の功を讓うんと捨一命の盡せぬ。
神の祐歎佛力歎まじへか二尺八分。恭心其外よ船とあり後とあつて早河の親の

必死より代りけんともあらずと疎まろ吾脩が愚痴と僻見す。世ふる子共を怪まで
存するのみ父あるも鬼あるも變化歟と疑ひすの愚まよ許へと白地より勧解つ
立。共侶より單節も泣腫毛二重瞼より重雲のむ憂ひへ世間より儔罕す再會
ば離稚枝の花の年を歴く共白髮より雪の松送の心うち解く本意ある對面成
なり。別離の翼も絶果より音耗空氣月のけづ七日の曉も名のむかはれども
側ゑと歎くらうとも只哀だを俺们が短妃妹伏の縁へ別れて後へきゆふ
あ。雁の翼も絶果より音耗空氣月のけづ七日の曉も名のむかはれども
年より下しう牛穀二星のあふ懶へあふ七者。影も苗び遊水のむぬ旅の衣を
纏ひ合へ冥土まで伴ひへせづれぬと長叹嘆きを送され。この身の身へ今まふ
措處かた憂ふたを勝くも萎む朝良の果敢あた露の玉の緒つゝをば絶よ日も
月も照らぬをつゝて何樂く存命ん骸へ生むをると心变らぬのか。ふ
後。世を憑れか。死ぬ死んで。死ぬ死んで。稽平が左右より腕を伸く朴刀を取りとる。

取らむ果を搔遣れば音音も俱よ推禁やく狂をとす御く鎮やる當一稽平声
立く理りれども娘か達事の始終を又えど死人と早ひよ浅き女子ありの
密ひ。カニ郎尺八中を虚ろ。日本魂の人よ捷れ。あらへだ。死と。の後も主を失ひ。
親を慕ふ姿をえしめ然とくかくその妻の命をあく断んとく。つゞり靈を
顕べ。これうのうをあがむ。天を恨み世を憤り。死を軽く死を樂む。只是愚
痴の恵ぞ。ちと。おお。良人の本意よ悖り。死して何の益。ある。戸田何よ役へ
題へ。似く意異。日を同じて語る。今つしと案ある。あらへだ。あらへだ。主役忠信
級の道筋。又携られ。又彼の討捕を。他の首級を。あらへだ。あらへだ。主役忠信
孝義の感應。あらへだ。庸事と。あらへだ。死ぬ。況死生の命あり。數あり。良人よ代り。姑
仕へ。且。す。菩提を吊る。それを。眞の貞女。それかくても聽ざ。ソノボド。辯せざく
諫。ソノボウ。単節へ大さぬ理り。切られ。かへを。す。也。顔を。ひく。擡ぬ。う。

け。されば音音ひゆうふくろの闇も天の色も明かりて、反故張の窓の下を見
ゆく。かうらむどもあらう。あれ。あれ。
やく。南娘は達心を鏡見て且て彼をえり。カニ郎尺八が姿へ消きえ。それども行
暴いたずら。兩箇ふたご。舊の役を彼处そこあり。要あらう。これもあくまでも不思議の事
だ。そく被かぶたうえり。といひて女同胞めいどうハ目めを拭ぬぐひ。とくわうよく像見ぞなしを
見る。これ。口をひま。
仇冤ごんゐ先さきを忘うつす隙ひまもあらず。ひだ歎きを真十鏡影も像あらわし人の送おくりせ
る。現何あらわさん。ひとそ駄たつく共侶きょうり立たつて床窓ゆかまどの片かた明あり。娘むすめも妹いももよどかれて。提つ
包いはらふ力ぢから。憂身うみふされられらも。滅残めつざんりて。燈火とうびの前面まへへよどく。推居すいく又踏
ばら。あく。ひくて。ゑ。然ぜんとうに立たつる夷いの声こゑを口隠くちくらして。かくべーと六夢ろくゆうだ。ちく。絶ぜつく神かみかぬ地藏じぞう
茂林あやのの曠野こうや。彼かれの病びやく臥おせ。妹いもと俱とも。馬うまを衆しゆせんとせ。時ときよ頗ひりよ
馬うまの屬ぞく。強たけて。坐すわり。畜生ちくせいの世よ。あ凡人ふんじんをも。知しり。駭おど怕おのれて。衆しゆせドとくく。
狂きょうひ。そくや。不今晚ふきよを甲斐かいあれ。と卿きみ。巴は單節たんせつもうち泣なく。然ぜんる所以ゆゑでそ

この両包りょうぱうを馬うまの負おきとふ役わくより。ひだ背負せふひ。かの時とき。もかね重ううふ覺かくる
が。阿姑あぐも。齒はせ大人おとなも見え。南阿姐なんあじ。そりう共ともや。同胞めいどう。被かぶく。包いはら。一隻いつせきの黒
えぞえぞ。草威くさゐの身甲みゆきの鮮血せんけつを塗ぬれ。韓紅한홍の痛いたみを送おへ。鳥銃とりじゆの裏うら缺くず一痕いつげん。六七ろくしち。
八花菱はなびら。小鱗こりんの腕鑑うでがん。脚盾きょとう。添そなす。それを。ん彼かれを想像ぞうぞうする良人よし。や。陣
陣じん。死死の烈れつ。や。ける戦たたかひの。かう。けん。と哀傷あいじょう。娘むすめ。達たつ。絶ぜつ。生いき涯さへ。歿め。

寶たからの疼痛いた。帶たすきを引ひ繕つく。ひうひや。娘むすめ。達たつ。經生涯じきうさいよう。歎なくとも憂うを遣おる。頗ひく
や。死死。次つぎ。かう。奇きい。繩なわの顛末たんまつ。これ。を夢ゆめとも現あらわし。も。ひゆく。親女房おやぢやうの髮は
解ほく。この両包りょうぱうを送おへ。子こ。共とも。寢ね。神かみ。け。か。れ。ば。この妻子さいし。と。く。志し。の似そ
だ。あ。ぐ。を。取とり。た。夕ゆふ。涙なみだを禁のら。か。と。鮮雄せんゆう。く。諫すす。そ。心こころの底そこ。弱より
果ごて。鼻はなの。こ。も。か。れ。る。歎なが。へ。哀あ。親女房おやぢやう。暗平あんぺい。へ。脣くち羞はず。て。胸むね苦くる。づ。小嗟こくわ
嘆な。か。と。よ。の。く。え。ん。も。か。れ。る。歎なが。へ。哀あ。親女房おやぢやう。暗平あんぺい。へ。脣くち羞はず。て。胸むね苦くる。づ。小嗟こくわ

こは力二郎天八が地袋とう落とす。又巻き。ととろくさう。この力二郎天八が地袋とう落とす。又巻き。家は脱糞やを戸田河原の戰ひ。お身一膚よ著て終よ陣歿もうるを然るを被ふれ世不かん後よこれを妻子ふ送せ。今よう良人よ立代りく忠孝やも不命を保てとのえ料をわへんかれば。彼世不存く良人の首を葬る日ふもモセ骸をも瘞うそく是夷でかと朴刀を晃りと抜く取直し腰を切らんと程ふ吐嗟とええ音音す。曳は單節へももく身を投げてよ喃と叫び立つ右ひざう携る眷ふをすく離は声を立く。そと物体を俺们を今を諭へかひゆる道理よ惺懶ゆうふ相応。クぬ刃物三昧自殺の覚期へりふぞ。身ひきまう身ひきと辯ひく。妹が力を勧へ辛くて取鎮やんと刀尖を筵疊は縫苗をく嘴を諫れば稽平頭をうち掉くりあく放きぬ怪我を裏ふつむを何どう笑ふ。いゆ。二日よ戸田河を。死矣。多きを。けり。も存在する。子共のあかり年來故主へ下す。もユバ校を勧。

解ぞ。亦是恩義の為めく疎遠へつやく不実ふわばか定一程か主家の滅せ。子共は訪ひく大義よカリこの時身を殺して彼舊恩不答へと云ひ。今まく不餘命をりうまで貪る。年老力衰へく故主の先途をうすすもあた殉死を義士の素懷。ひふ哀よ追ひく死を樂む女子共と一列よもひまくやだ。退ひく。と敷園く疾視。嘆きを推居ても更ひ单節へせん。也ふと叫びて兄弟す。お。音音ひ詠へ。衝と寄せく意情剛一稽平ぬ。殉死はその身の本意か。も帰参免許を受けて。是がこの宿所で自殺せ。法度を犯して故主を侮る罪を亦復あ。よ累ん加柄。莊役が徇傳する讐言敵の下知状いれてもあらぬを天明下す。還り。お。和子のうへと心ひ。舊恩實よ忘れぬ。擊られ。兩個の子共は代りく故主の顛ふ立影は添ひ死ぬ。打ふ潔く死んと身ひき。も不覺ゆうを窘めば稽平。莞ふとも。笑く寔よこれへられ。これとおち方へ私ト再會をしたの可あぬを。あ。

死矣瓜田の履嫌疑を後ふ送來ト和子又見參憚りあり。さくが大塙少が往
方を索く云云と子共のうも宿志を報くとも又かくもやうやん。嗚呼あらりと領きを
やうやく死を止め。鬼は單節ハ携りてお菴を放ちて共侶は辭を添て慰を猪平
ノ。諸ひく刃を輕よ納め告別して外向へんとしる縁嬪の障子を破と踢む。猪平
並立うち三箇の齋者真額鉢奉。索縛各身軽の打扮は是則別人か。昨來
莊役根五平す六顎介と左右不休く意氣揚々。声高や。小波。胸が浅も歓かく有
べと昨夕う猜。これどもゆ氣を宿町へ還る面色へ裏を垣根の間荒な所。
背門す。潛近つて。貴子の下よ終夜一五二十をみゆ。音音ハまく猪平すも亦
是煉馬の残黨か。道節が餘類。金縛り白井へ牽ん腕を回せと呼。腰よ著
ち黒縄をと。取りく投るが如く仇糾繫极く張肘へ車よ逆す。端錆の斧突立
た。手六顎介。行杖らせ。根林も技よ縁嬪を突鳴りて聞かす。

第五十四
白頭の情人合巻を遂ぐ
青年の嫗婦菩提ふ入ゆ

音音ハ。ひき。敵の間者よ裏を被もく陳ぢてもあがれ。鬼は單節を
後方よ添へて寄り所と懷劍の鞘を握りて立んとを。猪平をあくとく。
推闊。些も騒がせ。踢蹴る裳を引折く。两三歩根五平す進む向ひ。冷笑ひ
噫物。里人ホガ捕ふ。三昧鴻許。あひく。と。敵も足の力もねど。獨死人
ああ。ひま。かや。ちぢ。や。所作を。か今も。互益の殺生も放ほ。あひ。讐敵の半隻。望の隨よ死天三途の
瀬踏せよ。と。右ひ。か。左ひ。根五平擬議。氣色も。彼薙仕せと敦國。ハ。丁六顎介。左
とも老人。あれが。と。あひ。悔る。根五平擬議。氣色も。彼薙仕せと敦國。ハ。丁六顎介。左
右より。食する斧を振揚く。擊。御んと走り。墓。と。猪平。内。を。遣。違。て。接合。左
う刃の電光。左よ流。右よ柱。兩三刀打。と。そを。先よ進。し。丁六を。腰斜よ。破。と



研る砍りまく苦と叫びも又一斧うち捨て外面へ逃んどう。縁頬すら落る軀忽地よ
両箇よりれて倒れけり。顕介よりこれを見えりて駭迷かく庖籠のうえ走り避ひる程不
をも。ちかへう。やをひひく。あつと。とまつむ。おまふ。あん。ねう。とまつむ。おまふ。
音音が透きぬ逆撃の刃よ額を劈れく。叫苦とぞうと外面へ又久に肩尖あり背を
ぬごへい。あらゆ。あま。きし。とまつむ。おまふ。あん。ねう。とまつむ。おまふ。
ぬごへい。あらゆ。あま。きし。とまつむ。おまふ。あん。ねう。とまつむ。おまふ。
根五平はこの光景ふ舌を巻き膽を飛して立足もすく縁頬を踏外へ滾落とく抜
ぬごへい。あらゆ。あま。きし。とまつむ。おまふ。あん。ねう。とまつむ。おまふ。
せ一腰を敲たつ伸の慌忙犯逃走を。稽平音音へ信とえく血刀引提く共侶を追
うちもろ。さと。ねごへい。あらゆ。おまふ。おまふ。おまふ。おまふ。おまふ。おまふ。
轍免とほり程ふ根五平はもや庭門を掣く頻りふ走るあらゆ。曳ひ單節も氣を劔て
とも。りくら。俱よ焦燥ほどもあだ。奥のくふ入りあく曳と被る声と齊一出居の隔亮の間す
もあぐ。あらゆ。ねごへい。ねごへい。おとね。おとね。おとね。おとね。おとね。
打坐を銃鏡の対違を根五平は背を胸を擊れる苦痛の一ト声空を顰く仰
くま。ひだり。反仆れて息絶けを。やひがけを助火刀よ稽平音音へ驚犯あぐ立駐とえられ。
ひくひく。ひくひく。ひくひく。ひくひく。ひくひく。ひくひく。ひくひく。ひくひく。
曳ひ單節ハ立あく。諸ふをがる。破隔亮を裏面う。颯と推陶く頭れぞる大山

道節と悠々と願ひて諭を隔亮を曳ひふよ舊の如くふ閑さう。あ上坐不著
一。うべこれくとぞうふ音音があづその血刃を拭ひ納りく遠く主のほうへ毒手
を。あん稽平のあらぬ負ふ刃を納めくとび假よ且外面よ走りゆく根五平が死骸よ立
る。銃鏡を抜取りく頭を回て四下をアキふ荒田の疊ふ埋井あす。究竟の處ふ
とぞうべ恥く件の死骸を引揚起して推落とす立ててす。六顯介が死骸を揃
ひ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。
とぞうくおとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。
求食る群雀の離色よ降集るにかみ。やひ三箇の七骸を里人ふよんせどぞく。
あまく隠せ。音音ハされどもえ。圓扇を把く道節をう。扇ぎつ含めて
えべそ。昨夕を。まき。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。
ま今ハちく不ものまう。まとも。昨夕のあくの怪一死すのを。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。
とぞうき根五平木小辯の機密を知り。と。二へ。かうを轍漏ふ。枉津日の神つも。

暴んをよひ折込ふ還らせかひ。見る裏の微妙さと他事をくじべ曳ひ单節も
後方す存一額つむく恙かたを祝へける道節笑てされどもこれ、昨宵更闌く
如些々の外事、大塚かよ索遭ひ。さて犬川共侶す彼ニ大士を相侶く曉るふを
き。背門より入らんとせ折は曳ひ单節が哭声の堪ぬぢうかゆえり。異あべーと
來る。呼門もせで彼人々とぞ修奥立聚居つ叔稚平が事の趣カ二郎尺八ホガ戰
死のす首級の錯悞彼胞兄弟が七魂ハ要時姿を顕して親と妻とを慰らる。締
ももゆく竊聞く。それハまづ大塚大川大飼大田の四大士も感涙坐不禁やうす。
憐むトカ二郎尺八ホナ忠義の為よ命を隕せ。の形に。年来離別の父母を相合
兎と念へる孝感空そびて。その二親の再會ハ子共の靈の致せ。もこれ犬塚
小よゆる。皆是過世轉輪の業報とぞ覺る。をつむと原る。おれも
犬と同名。况カ二尺八の四字をよしと又合兎ハ房の二字と。彼ハ房へ里見の
愛大吾黨の大をと自然と苗字不せ。又身の中不癡わざも皆彼大す類り
けん字畫をヨロニ條ハ大塚生の説明あり。昨夕彼人々と送ふ意中と盡せ。其
詳よ示され。すな鑒説よ似れどもカ二郎尺八と名をのむ。相識きぬ四大士を
延さんと敵を防ぐ。戦死せ。唯士陥の所為のをかう。彼の共も山林房ハ
タゞ供へ房の大不宿因ある。かく。四大士の窮阮不代えと。可惜命を
隕え。死せんと欲せ。猪平がぬ死ざ。孚共の忠芳天の命ちる陽報。未世比
美談あざれ。曳ひ单節もひ死く哀。傷られ。七日々の追薦供養
かく菩提を吊へ。か死人のゐあべれ。それと彼ホハニ世の主役乳母子なれば。

莊助お告られ。時外よ立く。よしと。如此ぞ笑へん。さればと。猪平ハ廻焼雪氏不
と舊名ハ世四郎。雪ハ犬の娘と。世の鄙語もある。世四郎も亦大塚生不畜れ
ぬ。おまか。まづ來ゆ。おまよ。ト
犬と同名。况カ二尺八の四字をよしと又合兎ハ房の二字と。彼ハ房へ里見の
愛大吾黨の大をと自然と苗字不せ。又身の中不癡わざも皆彼大す類り
けん字画をヨロニ條ハ大塚生の説明あり。昨夕彼人々と送ふ意中と盡せ。其
詳よ示され。すな鑒説よ似れどもカ二郎尺八と名をのむ。相識きぬ四大士を
延さんと敵を防ぐ。戦死せ。唯士陥の所為のをかう。彼の共も山林房ハ
タゞ供へ房の大不宿因ある。かく。四大士の窮阮不代えと。可惜命を
隕え。死せんと欲せ。猪平がぬ死ざ。孚共の忠芳天の命ちる陽報。未世比
美談あざれ。曳ひ单節もひ死く哀。傷られ。七日々の追薦供養
かく菩提を吊へ。か死人のゐあべれ。それと彼ホハニ世の主役乳母子なれば。

俗より乳兄弟やく恩義へ敦るを喪ひ心の憂ひと。つたうとあらん。
天荒が鳥の両翼をうち落されゆふせう然とて歎くも甲斐荒所行こ世よ
雛あるカニ郎尺八ホガ親とかう妻とかう幸ひと歎か不景ひをよう。虎死と
皮をとる死入死と名をテと送せ老少壽天を命と悟と。誰う死ざば死葉
百歳の上寿を保つも命終き枕方よ残る妻子のかやみ。何時ともみかむ
わぐ死。さもやひどと懲よ諭を言葉の末よ置く露秋寒夜連々と膝よ落せ
感涙小顔を背けて嘆息は恩義よ厚き主命を阿ヒ感く。音音ハシマリ思
単節ハ辱さ不回答する。兩袖を各顔よ推當く。只潛然と泣かす。中少稽平
をう廻不退なく縁頬のあやかる障子の不うふを又た頭を低て黙然う
して道節うりんくや虎世四郎として圓坐よ入る。そくととぞ立れば
稽平へ稍近づく。あ恭く銳鋭を道節よ返して。不肖の某懃よ死

後れりやくよ見參よ入る。恥りくらひ。況二千年來の節を折え音音を
訪ひハカニ郎尺八ホガ戦歿の事の趣竊よ妻子よ報知と彼四士の往方をす
究やんとあひのを余る。昨夕圖らむ。田文とう。森蔭ゆく君を撞見す。太川生を
柱んと。やう違へる四箇の首級ハ舊縁の竭絶がりん。とおどぞ送よ知らう。いせ子
共の首級を其處すと主君よ携られり。亦是恩義の感應か。さればあ
その夜。太川生ホの四大士よ友垣を結せゆ。死して悔かにす共が送忠をす。く
遂てゆと。ひり頻りよ感激の臉よ誠を顕せば道節も亦感歎く。豫てこの名を
號す。勝まる老人の志氣頗直。今眼前よ行狀を。さればゆく。感歎す。若ヤ
時一旦の過失ハ誰のぞあん。今矢じく。羞ると。舊恩絕く忘ゆ。とあく竊よみ
て。あを。子を相助けく。もが爲ふ心を盡せ。その忠。功莫大也。かれが今これをむ。一
被一條を贖ふ餘す。あるまく父尊靈よ。かう代ります。勘當を免めり。

おとね　つま　。りあらうまをあらうかだま　きざ。うれら
 やまいひあを。　。えども　。うべ　もひづぎ。
 稽平額よ汗へてこそ身ひうけもなむ。勘當赦免の一條へ難くゆども頭ふ霜す戴く。
 淳世ふ望かぬ爲へ况子共を歎よ撃せ。歎がの挾霧無常の嵐よ花り萎ひ香ひ耗る。
 兩個の媳婦を寡ふあら。恥があらく妻を娶らんや。あらかじめ免許を稟ざる。昨夕
 音音を竊ふ訪ひ。舊情よ引きやさんと思食う故あべーと柄ぞくくいと
 戯言も事あざん要かぬまどと喰たく席やも堪せ文と道節急よ
 呼とあく姫よまのまほ腹。そと言下とび口づり坐てハ駒も及び。され豈漫よ戯
 ど。うじるまち。　。まくまくまくまく。　。あらからうる
 言と老人老女を辱りんや。一日かりとも稽平ととあへ成夫婦よせばもあらば忠孝よ
 身を殺する力二郎尺八ホが志ハ画餅とあら。母のとめく蓑衣の父とぬれぬ彼少
 きえん。　。あらかじめ。　。うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 愁歎その亡魂の顯れも尺このゆかありそ。かれがその子を母のとめく父見ゆ

ぞ
 かくをうとけやう。父あり母ありくの孝心を果さむと利害へえむと分明に彼
 あーん。　。えんこく　。つあまこともあらううけと
 樂え淫を淫をのう皆媾といふべしや。これを推辞が子共の為小慈かむのといれん。
 あらかじめうまくあらかじめ。　。せう　。ぶりもぎのま
 便是力二郎尺八ホが忠孝を賞ほる第一議枉く參意ハ後へ。又稽平が音章
 と訪ひ。素より情義の為や。公平に證あらひのとられつゝかと疑ふ。元件の證
 こもあらと懐より二通の書状をそらせてうち被き。それを音音よ示してつゆう。
 えべいねづみち。　。といひ。　。のゆあらとうえ。うも　。おちう　。と
 あれ昨々大塚生よも下りて對面せーとたは彼村雨の大刀を返して送ふ意中を説
 づ。うやとひ。のねづみちあく。つぢ。　。おとよ　。ちく。　。あらう
 盡一と且稽平がタを向ひ。大塚生ハ云云と巨細よ告ぐ。音音へ與るをの書状を
 あらかじめ。　。おとよ　。おとよ
 示されぬとを疑ふあらねどもあくとの意をゆまに。おとよ　。おとよ
 状の封皮を折ちくとけてふ力二郎尺八が母の安否を問ふ状。又四犬士を紹介を
 げいふを。　。おとよ　。おとよ
 別紙よ追書をれどもそのを迹をあらねばとも稽平が筆をとさ。ざるをその
 紹介を力二郎ホが名をのをあらて。稽平が名を署せざる。嫌疑不憚る老人比

用心かんと稽へつてその潔白を感じ。うこの一條ひと稽平が志を知るのをかく。刃を
過失かへり。神宮より浮世を避へ。うり敢又他家より仕へば子共の為より帰来せ
乞ふ。音音がぬ小妻を娶らひ。事のあよ及べどぞ。賞せば天意より。さう。こともうち。
カ二郎尺八か鬼魄。遠く去らざれ。復立へり。これを聴け二十年來離別の
父母をいとう不合せ。多くゆゑ。汝ホガ孝心の応報より。恨く汝ホを
今あで席より侍らへ。歎び身を取ね。とよそ西箇の首級を引寄せ。うち覆ふ
うち紙を半ひ。おなづく。とよく苦一死胸ふのを。身を筆。一壯士の泣ぬへ泣く
あり。至極の道理よ。諭され。稽平音音ハ白麻の有無の回答よ。か
隠り。を曳る単節ハ慰め。名をも送。良人の足跡のこれも紀念よ。か
あ。とえ。ざれべ堪。ざれ。あひの歎聲。道節声を勵へ。意ひあひ。か
かくも。ふやどぞ。折。何を歎。酒。あると。咨。と。ば曳。単節ハ歎を禁也。

きのふ還らせあひかば進らせを。とやひ。つまげあひ。貯の一升をうる。待え
か。と。うふ道節額を。甚佳々。疾盃の準備をせし。と。うふ単節ハ。う
え。ね。地炕。柴。折。焼。卑。庖。福。赴。切。酒壺。と。う。修。携。事。同胞
酒。を。盪。く。折。敷。載。ほ。盃。の。縁。ハ。缺。ても。相生。の。松。操。の。高。蔵。繪。昔。堅。地
老夫婦。を。如。此。ぞ。壽。く。七。夫。達。の。情。願。遂。く。俺。们。あ。よ。面。を。起。主。恩。の。賜。あ
あ。と。詰。び。こ。の。う。へ。あ。べ。し。と。祝。して。穢。セ。飴。子。ふ。酒。の。ミ。わ。り。と。肴。よ。单。節。を
と。つ。そ。と。と。外。よ。う。求。り。や。せ。ん。と。見。く。を。道。節。聰。く。空。と。う。外。よ。求。る。肴。う。彼。究。竟。か
物。を。あれ。田。文。の。茂。林。よ。稽。平。ゲ。持。參。の。首。級。ハ。當。坐。の。納。聘。駄。一。三。宝。平。ホ。を
肴。み。せ。バ。觸。體。盃。も。り。や。あ。く。誰。珍。重。せ。ま。ぐ。だ。と。く。席。を。改。り。よ。と。も。
斧。を。ま。く。と。妻。を。娶。る。や。媒。を。ま。く。と。の。人。欲。得。と。え。く。り。う。隔。亮。の。あ。く。不

声立く。又やや雪のあら髮もうめとすくとのつりある相生の松年ゆりそけ
あひ生の松アソウでごりかげれと謠連つゝもゆく齊一席よ著くもの。是則別
じ。ものちゆきざのねづありのつだき。すまほんもあひえど。みかをへい。
命だ一の著座ハ大塚信乃次よ莊助現ハ小文吾皆相平ふうち對ひて恩人
金急か。もう少しうる再會ハ枯木枝ふ開く花を挿頭をやもまに歡びあれ。
きの白井の危難を脱き多く走る。夜不知案内の山路よ迷かくこの處へ立
もぬ。遠ふ適過す。を幸か。莊助が犬山姫とつき立て追つて索事不
あ。入煙遠き山蔭。世は憚の例もかれ。野火を焼く四下を照。犬山
姫は對面し送よ意中をとれ盡て。渴望の素懐を遂す。かくて食うち立て
未明よきへあられども愁歎悲泣の折り。驚さんへまへゆく。且く便宜を候。程不
可。賢息の義死孝感彼不可思議の一奇事。小宵没れ肉動なく慷慨嗟歎よ
堪。ざうたが。程不辭者ホガ利慾の為不機密を拂ひ。不覺ふその死成饋り

た。患ふ足り。又寄る歎り。あらんと且く後詔を心々く對面達
いまか。ああぎ。今小及べ。嗚呼義の無窮。世は有り。兩賢息の只俺们を延さんとく。
其處小命を隕され。うち歎くもあり。も況離別の二親をひとよせんとく。
亡魂の「タあふ頭れハ傳稀。純荐へ今との迷惑を果えん。ホ俺们四名ハ
この婚姻。永くもん。を樂へ。便是カ二郎尺八の荐義。酬ふ寸志。うるさ
が。許さ。かべ。と正首よ舞齊。一來意を告て。の婚席を提撕。階平羞る面色
ゆく。過世の業因。故ゆ。死をベク。と。ゆ。死ぞして子共を擊つ。刺相忘。かぬ
合色。辞ち。方か。故主の懇。申たが。人よ。く。四柱の俊士。英傑。永人。とあり
ゆん。か。分。過。僕。偉。當。り。く。と。固。辭。道。節。推。禁。り。爲。謝。義。を。述
答。礼。して。音。音。曳。の。单。節。ホ。四。犬。士。ホ。引。見。れ。バ。四。犬。士。ハ。そ。の。不。幸。を。悼。そ。懇。慰。め
マカ二郎。尺八。ホ。首。級。小。對。ひ。思。を。謝。し。生。入。ホ。の。ひ。と。く。誠。心。言。下。小。頭。と。く。食

感涙の嘆びふければ叟ひ単節ハ酌ゆも堪ば頭を低くうわ泣くやう音音も頗り
目を拭ゆく尺道節がう人をのと四大士お憑み笑をす祫とひ恰とひ人情節義
膽小鋒一骨よ徹ち哀歎苦樂よ道節ハ稽平と臉潤ふ目を指しとあく嘆息
をうけるかくとあくおふらしきれ。四大士ハ婚禮の式より挾り提撕く稽平音音よ形
ぞうの合巣執綿して千秋樂とぞ祝うける縛既ゆく果一ぶ道節うて詫びて
更ふ又盃を四大士小勸る程ハ叟ひ単節ハ庖腹小退りく飯を炊き膳立て送
く酒食を薦れば音音ハ地焼の邊よつへるく酒を温め茶を煮る官待大
きくかくさうけもそぞう程ハ道節ハ四大士不告もす世小情人の夫婦とありくも今も
昔もえくれとも稽平音音が如丸ハ稀べ就て又晤譚ありカ二郎尺八ハ青年某と
同ドヤーふともゆく妻を娶りハと父の指揮よあれとそハ音音が老実よ某を
もぐも。まことあそい某ひ。お子をも。おこちこけつ。あくとつま
字育くる又稽平が先非と悔く漁者とあるを不敢又他家より仕へど亦別妻を

娶う。やまとまきとまき。ひちうあれ
夫婦よせんととと。とあくと所れかればその子かよく妻を娶らせて親を慰め
ちあくべ。余弟カ二郎尺八を婚姻の次の日より母よ別れ妻か別れと再會の時
一もかく忠義の為小身を殺せども孝感の致を所歎との二親を全て婚媾の
わざんを。すがつき
遺念を果せり。あく頗奇かくび。と火が衆皆感嘆して道策が惻隱の大
きくかくぬを稱けり且して信乃がいゆう現成敗へ必一も前知をざむとえり。一
壁言が娘雪父子の存亡吾黨の危難の如くそれがいゆう日稽平叟よ一封れ
書を委られる某よ先あて大川生ハあすあらゆの邊よ對面と犬山城の
御道すを。某よ引見へう加旗被書状ハ犬山生が閑封して後よそのゆふを
うち。辯翻語。お似えどもの釈を失はど是則機変。機変へ前知を失くべ。
もが彼根五平ふを漏らし。擊曲れどもあふをんハ究を危一もあうべ。

其せば莊助も亦膝を進めく彼定正へ大歎之縦今繫は果し。大山町方をも。
越後竜門ホをきし。敵兵賊討捕吏が。又復讐の義と稱す。又定正を討んと
やがハ犬士具足の日千里見殿を相佐け。その隨て軍をも。今ハ時を
ぞとひ現ハ死不同意して兩兄寔不説ゆ。カ二郎兄弟の首級を羈よ葬りて
あづを流を落ち。とひか。傍をうえれば小文吾も亦領だく。究竟の處あり。
姥雪夫婦と両端婦ハ。行徳へ。適て父文五兵衛と妙真と。恩をも。夫
後安けん疾との准備を。あめう。と四人齊一御も。道節この議よ役ゆ。耽く
精平音音ふ。締のこうをぬき。而行未と相譚。ホカ二尺八分首級の。今
この敵地。埋葬ん。快くぬき。されが大田めを煩さん。行徳へ遣て。彼地ふ
菲。よき。幸中て馬もあれ。衣裳調度を。内負して。東ひと單節と送代。
韋もせよ。衆もせよ。脱落させ。急せば。音音ハ行李の准備して。昼餉の料の糧

お。おどぞ。て。やど。ひぐて。ひどよ。うまこや。○ま。うち。おき。う。○そえ
飯を人別ふ。累む程ふ曳ひ单節ハ馬萩屋ある馬。屢穿林を飼ひ。縁頬
ちひだ。○の。そ。そりつ。だ。○の。そ。そりつ。だ。○の。そ。そりつ。だ。○の。そ。そりつ。だ。
近く牽す。るを檐の柱。繫駐。く。音音。稽平。ふ。ほ。と。ふ。並び。跪だく。
豫て。ひ。次を。自殺の。タハ。この禁を。せか。ふ。う。あ。う。任せ。ゆ。ね。ど。も。切く
け。あ。う。尼と。あ。う。良人の菩提を。吊青。ころ。の。と。ハ。許。を。ゆ。と。ひ。も。訖。し。を。准
備の。刃物を。も。み。く。取。く。發。願。得。度。の。頭髮を。拂。と。剪。放。ち。カ二郎。尺八。分。首。ふ
添て。二。秋。ふ。推。包。ミ。引。綿。び。軸。の。前。輪。よ。附。る。ふ。あ。ん。稽。平。音。音。ハ。感。嘆。し。と。禁。と
ち。ふ。竟。よ。及。ば。道。節。ホ。の。五。犬。士。も。貞。操。節。義。を。嘆。賞。し。と。で。不。便。よ。ひ。る。當。下
を。も。ひ。ひ。く。と。り。ホ。づく。う。ま。音。音。ハ。曳。ひ。ホ。げ。荷。を。附。る。馬。を。つ。く。と。う。頻。り。ふ。嘆。息。と。彼。馬。の。ゆ。い。も。和。子。ゆ。と
豫。と。報。伝。妃。賓。客。達。せ。也。彼。古。主。の。衆。替。ゆ。く。年。来。祕。藏。の。逸。物。あれ。バ。去。年
煉。馬。の。没。落。ふ。敵。ふ。取。せ。ん。と。の。を。く。と。兩。個。の。媳。婦。を。合。鞍。ふ。衆。一。て。重。圓。を。脱。き
や。た。を。い。ご。この。地。ふ。落。苗。り。そ。も。これ。ぞ。古。主。の。像。見。と。そ。ば。貪。れ。死。家。ふ。畜。立。く。豫。て。ハ

和子の乗馬やとせひのをあひだ。昨夕子共のそ魂を又合鞍よ乗せたまつけの父の
こともくふわ。こさうや。子共の首を負てと他郷へ遣らんと世とそ時とて畜生もさび朽をくやさん不便
をと今をあひむ。を偲ぶ説言も忠義の外に他うぞかた現憑いた誠心やと人僉を
感ける。が中か稽平の道節ふ希望ゆき婦女輩を下總へ遣まれんハアドー某ち
子共より君お役ひまう同様の諸君子の行芳名をも聚負てん何處も召されよ
か。とやを道節坐あへどそん究々益の譏え聲言が雲と水との如くあれど各袂を分ぶ
誰う亦との往方を定められ既か犬塚生と別後の事と相諱す。今現在の六士の外に同
因同果の二犬士ある。ちりん。おはく。おはま。おはま。おはま。おはま。おはま。おはま。
か。遭ぞとあぐだ。かれが後者かたとよされ故に音音共侶よ行徳へ赴けか
き。きくあく。ともそそ。とく。やそいのぞみうか。おはせ。あはだ
諭せ又四大も鮮を添てぞ禁わける稽平望を失へて悵然として退たる。道節うち
そ。よくら。こころ。さがへ。ざいわあきう。まとそやう。あは
そくや世四郎さうと心を苦へる。この三室平と駄一ヶ首級をあらぶ捨て切く邁バ勝て

脱去マトといひてあを庭門よ梶首せよと家景稽平易を起へ。二級の首をかとゆく。
身もと。あびく。つね。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。
諸折戸あく逆釘架小串祀並べく梶かけ。既ゆく起行の準備をそも整ひ。道節
あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。
愀然と西犬士をええりく某今一條の懺悔あり。家小傍へ。秘書かうて火道の術を
獲く。身を免まのを歎か。克とひ絶く要す。勇士の行為死のみだ。要領の難か
ま。やき。ひか。く。み。
臨て。身を免まのを歎か。左道の異法を断ん皆え。と懐す。火道の秘書をそうひし。かく
書を燔え。左道の異法を断ん皆え。と懐す。火道の秘書をそうひし。かく
燃残る地炕の火中へ忽地破と投捨。ひ。蹴。ひ。立のび。火炎と共よ捕まの兵ひの、
程ゆく潛寄けん。隊八十人許柴垣の蔭樹枝の間あり。簇々と走りゆく御詫ざと
呼。あく。あく。のび。うと。き。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。
呼。あく。あく。え。うと。き。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。あ。ひ。か。
引受く修煉の大刀風瞬間よ真額肩尖向敵當るふ住して砍倒を枝も刃も海内外
傳。稀うる勇士の働く孰二人も漏さず死頭顱を並べく撃れり。もとあれと矣去



立並ひて衣の衿を結りて血刀を拭ひ納る程一もやべ廻する陣鉦大鼓より衆皆耳を歌て原来この隠宅をもくも知りて擊んとある乞ふの雜兵のをかば後詰れ大軍白井より推寄來るよとどひを中よ現へと擔旁の松よかくと攀登り又こそしと内りて降く莞尔とも微笑をぬかひ以ぬ敵の軍配其勢九三百餘騎田道里道捕詰く既よ間近く推寄來り。あはとも吾黨が力を勵して數々破えよ敗れぞとふてあはある。ありわしく勇る腕を扼りて騒ぐ氣色へあるをうす當下信乃ひ小文吾ふ彼分捕の刀を贈りて某ひ辛ひ大山生の厚義ふう。後村雨の大刀を獲れば今ハ三只の刃をひそむ獨和殿ハ副刀や。敵へあくそ天刀折れか。何をりて防ぐべ。且くこれをひ。

帶をとひて遊与せん小文吾ハ脣一と受とうく。軀て腰を伸添ける。の間よ稽平音音ハ力三郎尺八が像見の身甲投被て腕鎧よ鉢巻精悍く音音ハ納戸よ秘置る。難刀を取て挾み稽平ハ朴刀を腰よ帶び跪をく頻りふる道節及四大士を

諫る。嗚呼。がまうひゆども敵を侮るのハせび謀かたひの危一諸君の武勇向ふま。きちんとくめあはん。前かく鬼神を拉ぐひ段ありとも寡をりと衆ふ敵をうへて五指の彈くや一指を折。うらきいそこ。かく。おもやふ。かく後悔其處不立き。某夫婦へあくよ籠りて命限りよ寄ぬを防ん近づぬ間よ敵をさり。うらみち。かく避くとく背路を落させ行住不便不休ひども曳ひ单節がう人をのみ憑くあると只顧ふひへる必死の覺期よ四大士の道節が回答をせば頭を掉く。うへ。ひくとひよひこゑ。ひつりくご。あけい。どうあらひ入。うけませいだいえ。ひぢうや。あてあくようへん。うへ。うらみち。かく受一再生の大恩をあざ一点も酬ひを况可惜兩賢息を擊はせ。憾の大きくあらぬ。今亦敵を叟ふよ任して苟わも脱ひそよと諸声悍く否されが道節も亦ひそく聽ばれ一步も退く氣色かく俱ふ云云と諭まわん。寢を单節も共侶やとそ齊一死をぞ究わけ。稽平かとね。音音ハこれらの言ふ又何どう答けん畢竟姥雪夫婦の存セ五大士の進退りふぞ。とふへんつ。あたうえ。どうくま。編を継だ巻を更く第六輯のそらふ解ん。姑く餘稿を輯外よ措の。

里見八犬傳第五輯卷之六終

編述

曲亭馬琴稿本



淨書

田中正造

画工

柳川重信
溪齋英泉出像

削刪

中村喜作
神田菴驥徳

家傳神女湯

一包
めド人諸病すす 第一産前産後ちのまよめえスうち三十分
石頭ふちひふりわひ急へんをもひの功あり又二日えひます半
けそよのひのあひ出一萬小百粒の功のうやうもひひのゆかうづか

精製奇應丸

萬あめをえくとお惣の加げんをより制方をもあらうと世上の類
萬とあかくらむぞ奇功めゑ神の如へつとく用ひかくと知らん
大包二音粒餘入代半朱 中包三十六粒入代萬五下 小包十粒入代五分

婦人つむ虫の妙薬

死却ふるゝ産後かゆきぬの用ひて即効有
一包代六十四文
半包代三十二文
加えんをもれこのかすその功を及べ
一包代五分

熊膽黒丸子

まのいの正もくをえくとくせんむくとあくの功を及べ
一包代五分

製藥并弘所

江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店の向
神田明神下山本町筋同明町東新道入口 瀧澤氏

取次所 江芝神明前ひまき市瀧○大懸殊橋筋がね町南入河内倉太助

里見八犬傳第六輯全五冊

當未士月を遅滞うど出でてやひ

全初輯ヨリ第五輯迄升五冊

先年うこの節度追々賣出一置

朝夷巡嶋記第五編全四冊

第6編全六冊當未ノ十二月うち出
第一編ヨリ初編アリ第四編アリ右四分

越後雪譜

江戸著作堂主人著 北越鈴木牧之考訂 近刻

秘笈名方

神田瀧澤興継宗伯甫纂輯 多く経験の良方をもむ 近刻

文政六癸未年

大坂書林 河内屋太助

篆硯壽利市三倍

馬喰町三町目

春正月發販

山崎平八

